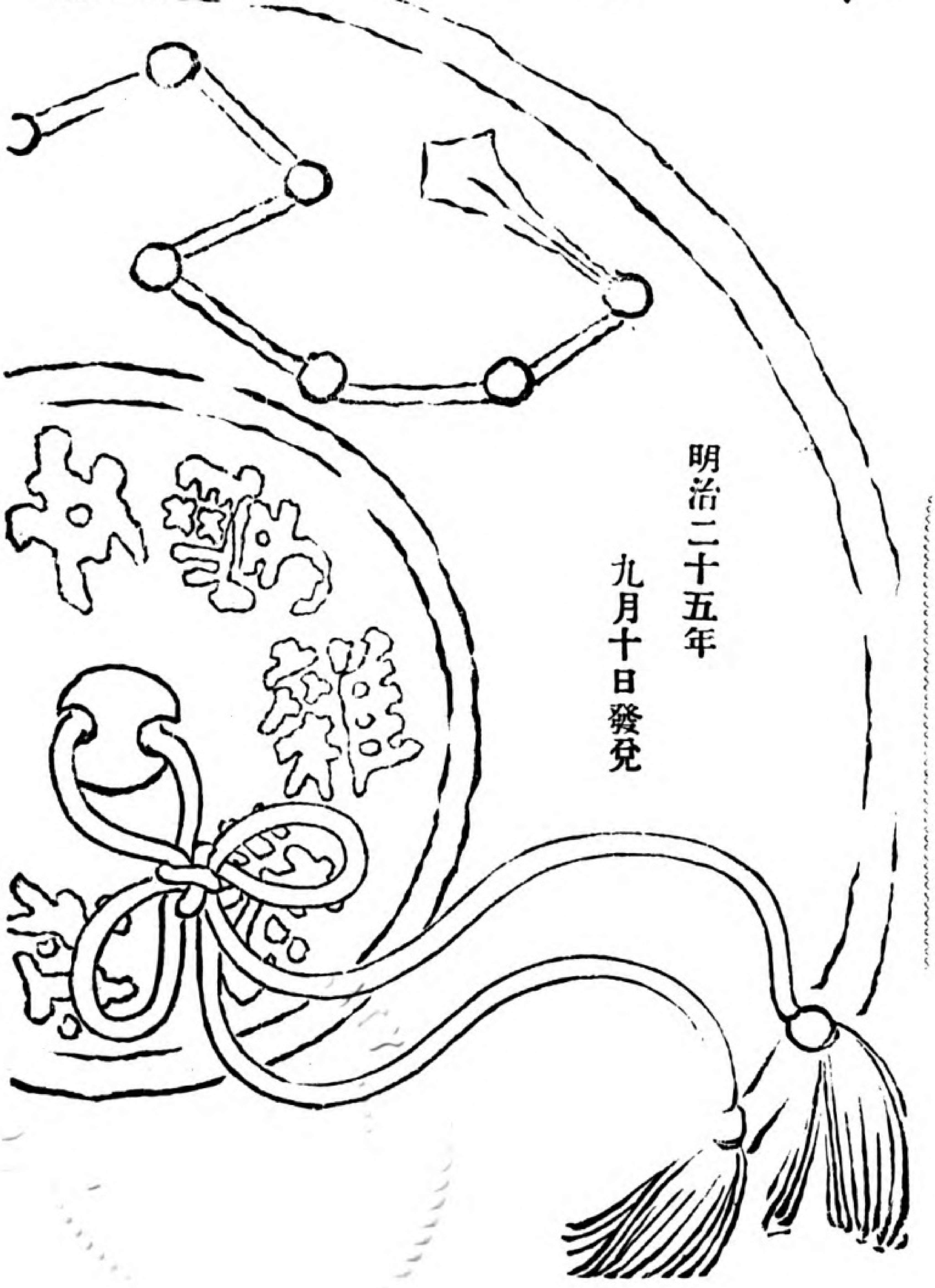
六合雜誌

第三百二拾七號

甲の巻



明治二十五年九月十日發兌

注意

社説**日本風及西洋風**は人に、追從家、反動家、超然家の三性情あろをより筆を起し、現時社會の傾趣を明快に批評したり、改進者の假面を剝ぎ保守家の寃を雪ぐあり**二宮先生報德訓**は先生が天保大饑の頃甲州の某氏に書與したろ者を某氏の孫秘藏より出し世に公にしたろ有益の訓戒なり**坐禪の辨**は天知子が實踐工夫の后に成り着々として要を穿つ之を基督教に利用すべき方法を細述して快潔の味あり**島田君開國始末**の書法に關する疑問の演説筆記を細評し、且つ、排曲學論、明治政史等を一評す又**獨嘯偶錄**を本號より揭げ初めて彼の天地管見と兩々相對すべし**摘要**には近時出版の雜誌新書中より注意すべく記臆すべき者を拔萃す、又**三日幻境**の續稿は透谷子の緻密深情の筆に成り其始末を收錄す。其他「夏草」あり「片々」あり

Sept. 1892
No. 327-1

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 327. SEPTEMBER 3rd. 1892.

EDITORIAL:—The National Style and the Foreign Style.

BYOGRAPHICAL:—Ninomiya Sensei and His "Hōtokukun."

NOVEL:—"Natsukusa".

MISCELLANEOUS:—Secret Thoughts. Three Days in Dreamland.

LEADING ARTICLES:—What is "Zazen"?

CRITICAL NOTES:—

ABSTRACTS:—

本號(第三百廿七號)目次

○社説　日本風及西洋風

○史傳　二宮先生報德訓

○小説　夏草（第四回）無名氏

○雜錄　獨嘯偶錄（幼な兒、知らず。懺悔。三日幻境（透谷）

○論説　坐禪の辨（天知子）

○批評　開國始末の書法に關する疑問。排曲學論。日本博士全傳。明治政史。勿。

○摘要　眞正の善後策は議會解散にあり。死。紙幣流通高軍費及教育費。靑年記者必讀の書。昨年中英米新版書

○片々

前週(第三百廿六號)赤表

●社説　情交の辨　（乙）

●雜錄　避暑(ひさご)○茶話會（序）。いけない奴だとて叩く。洗濯の大助け。物干の綱の竿。男の兒と女の童。婦女子の集會。年寄の安心

●文藝　新習字法○習字二個の目的○作文に要する二要素○問答（女の子の讀本作者。雛嫁の元作者。どうして文學者になれます。

●論説　日本に於ける基督教主義女學校の目的如何

●家政　小兒に玉蜀黍○家庭の養鷄○子供と醫者○つや消しガラス家內製法

●史傳　新來の客ウエスト孃

●摘要　女子の風儀○婦女問題に關する書籍○女子の大學に入るを許すの議及び女醫に就て○新內閣員の年齡○家禽の飼料○女子高等師範學校卒業生別

●批評　國民の友夏期附錄の評（雲峰子）●女報

前々週(第三百廿六號)白表

●社説　各地の青年會に檄す○孤兒院の事業及び救養（獻身者の注意す可き問題）

●批評　晩近の人物評短評（作家いろ〳〵）。春畝先生に與ふ。歷史家としての新井白石。德川家康。大臣月旦。一休和尙○文學一斑（透谷子）○桂園叢書（雲峯生）○新日本史○家庭雜誌○新思海

●雜錄　天地管見（人物の理想。ユーモアの淸潔。正當なる自修鍛練）○緇禪窟雜感（白骨の人先づ現はる。三女等の顏入來る。泣かしむる人壓來る。夢に武器を得たり。漸やく興味の境に入る。禪僧厭世の色なし。坐禪堂の觀。禪宗臨濟派の教旨。居士號を與へらる。）

●小説　人さま〴〵（二）さむらい。（若松しづ子譯）

●摘要　地租一分を賣却して公債を償却すべし○日本初期の傳道○大學總長板垣伯○九鬼氏洋風技術を排斥せし例證及び美術保護論

●寄書　故山の日（日本の一學生）

●片々　九州夏期學校の概況

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百廿七號 明治二十五年九月十日發兌

社説

日本風及び西洋風

或方面より觀ずれば、人に、追從家、反動家、超然家の三種あり。故に、社會千百の出來事にも亦た三樣の傾趣なかる可らず。

東に向つて追從するもの多きを見、實勢東にありと言ふと莫れ、追從する者の希望は東方にあらずして實は他にある也。西に向つて反動する者多きを見、眞正の必要西に存すと云ふと莫れ、反動する者の眞意は必らずしも西方にあらざる也。或る時は、東し、或時は西する者を見て、彼れ追從す、彼れ反動すと言ふと勿れ、彼は超然として反動追從の上に卓出するとなきにあらず。夫れ、追從か、反動か、超然か、三者の實相を觀ぜずんば、人の眞情を洞察すると能はず。如此く、亦た、三樣の傾趣何如んを辨ぜずんば、社會の活勢何れにあるかを識得すると能はざる也。

所謂る追從家なる者は、無主義、無節操の徒なり、其の走るや、勢にあらずんば利なり、名聲にあらずんば安逸なり、要するに、彼輩は自から益するとを先にして、他を益するとを後にす、故に、危ふきを避けて安きに就き、破壞を懼れて調和に周旋す、一と度び勢向に乘ずるときは、風のゆく手に法螺を吹が如し、音聲壯大なり、一と度び勢向に反する時は、閒として默し、暫らくにして亦た流行の聲色を遣ふ。此流大率ね才子なり、故に器用にして物の役に立つとあり、事なきが故に翩翻として翺翔し、大器の鬱として隱屈するを嘲ける、得意の躰たらく、華やかにして自から驕るに足る。此流大率ね改進者なり、必らずしも一個の理想に向つて猛步大進するにあらず、其の輕薄にして守る所なきが故に改進者たるなり、此を以て、世界の形況を耳聞し、一と通りの新思想を速了し、頗ぶる圓轉推移の妙を得たるを誇り、彼の豪骨激氣の輩が、多く偏僻固陋なるを非り、其の融通の利かざるを見て手を拍て笑ふ。此流大率ね投機者なり、慧眼時の趣むく所を察し、妙に時流に恰當す、故に其言大く用ひられ、其事多く

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

功を收め、時としては先見卓識の譽れをすら受るとあり、左れど仔細に之を考ふる時は、其言行見識の時流を導びくにあらず、時流に導びかれて一歩先進の燈灯持たるに過ざる也、故に彼等は彼の反動者が大率ね時流に逆行し、言事實功齟齬して大抵失敗するを愚なりとして笑ひ、他の識見を頑固狹隘なりとして嘲ける。

反動家は之と正反對す。固より節操あり、又多少の主義あるにあらず。但だ其主義は、虚僞を嫌ひ、輕薄を悪み、追從を恥ぢ、弱きを憫れみ、强きに黨せず、取遺されたる少數の人、及び一部分の事を保護せんとするを旨とし、必らずしも、一貫の眞理、天地の大道を標識して事々に之に適はんとするにもあらず。一片義俠の胃動けば、時ありてか、眞理及び大道をも踏付けにするとあり。故に、其主義は道理の主義にあらずして、情感の主義なり。たとひ道理の主義ありと云ふと雖ども、此主義や、數ば情感の爲に制せらる。彼にありて、情感は消ざるの火なり、道理は斷續の水なり、此水、遂に彼の火を消すと能はず、寧しろ蒸化して感情の勢力を强くす。左れば、其着目は、目前の事に偏す、惜むらくは、遠大博弘の識、一定不拔の經綸を欠くと雖ども、其目前の事を處理するや、至誠にして熱愛なり。たとひ、天を忘るゝとありとも、其友を忘るゝとはあらず、たとひ宇宙六合を出づるとありとも、其家より離るゝとはあらず、此流大率ね目前直接の熱愛家なり。夫れ、既に目前直接の事に執着す、此を以て、眼前の成行に激昂し、將來遠大の事を忘れて、痛歎痛怒す、此時に當つては猛然破壞の巨勇を生ず、其勇もとより動物的の臭氣を存すと雖ども、鬱勃たる至誠至忠の情之を激勵して煥乎たり、誰か之に動かざらんや、此流大率ね破壞者あり。但だ其破壞は、情に發す、明哲聰慧なる道理によるにあらざる也、故に其破壞は、必らずしも破壞を旨とせず、一と度び、其情を激する所ろ熄み、其掛念する所ろのもの安きを得ば、釋然として解け、勇氣挫然として滅す、此に於てか、先に壞壞せんとする所ろを保護し、更に忠實なる保守家となるとあり、故に此流大率ね破壞者たると共に亦た保守家あり。蓋し其保守と破壞とは、外形黒白の差ありと雖ども、内面の情、實は同一の根元より發す、彼は必らずしも破壞者にあらず、亦必らずしも保守家にあらず、破壞や保守や、必竟其反動する

所によりて生ず、其本質は反動なり、而して反動の因て起る、目前に激して遠大を忘れ、弱きを憫み少數を思ふて、大躰全斑を達觀せず、多くの美所と共に多くの短所を備具する頼母しき片環もの俠骨あるに由る。故に此流大率ね義俠の骨あり。

左れば、追從家の本性たる必らずしも眞正の改進を知るにあらずと雖ども、其薄弱輕軟なるが故に大抵改進の處置あり、反動家の本性たる必らずしも眞正の改進を知らざるにあらずと雖ども、其偏固義俠にして常に彼の追從家の處置に激するが故に大抵保守の傾向あり。あゝ、保守論者必らずしも保守家にあらず、實意改進を冀望すると、彼の輕薄なる所云る改進者に優ると万々なるもの固より之あり、たゞ其の反動的の俠骨之を激して、議論極端に走り、口、心を現はさずして、之に寃名を課す、悲しひ哉。

然りと雖ども、追從家、常に必らずしも改進的なりと云ふ可らず。更に一種の追從家は、保守的あることあり。況んや、追從家の本性は追從にあり、世上の風皆な保守に向て吹く時は、彼亦た保守に向つて追從すべし。此故に、追從家、常に必らずしも改進的にあらず、時として亦保守的たり。其行易きは改進にありと雖ども、其の行くや勢にあるが故に、時ありて亦た保守の勢に向つて甘んじて走る。而して追從家の一轉して保守的とあるの日は、反動家が飜然として其の保守論を止むるの日なり。

此に至り、世人思を潜めて、近世に於ける所云る西洋風、及び、日本風なる者の傾趣何如んを見よ。鹿鳴館に踏舞あり、諸學校に英音あり、洋風切りに流行し、洋行尤とも名譽ありたるの當時、所云る西洋風の宣敎者たりしものは果して何ものぞや。其極端に達するや、忽然として國粹保存の聲きこゆ一種の新保守論鬱勃として激發し、日本、大日本、大日本風の論万丈の氣焰を吐けり、當時、保守論を爲せしもの果して保守家なりや、彼等そも〳〵何種の人ぞ。而して此時に當り尚依然として改進論を絶叫し、いよ〳〵西洋風を唱ふるもの何處にありしや。暫らくして、彼聲天下に遍ねく、「日本」の語一種の流行となれり、神主、坊守、僞敎育者、僞愛國者、續々として日本、日本と叫ぶ、此時に當りて、更に改進論を主張すべきものは、何人ぞ。

夫れ、人の性情を知らずんば、社會を論ず可らず。社會學は

心理學の上に立てり。彼の三種の性情を辨ぜずして、世上の時論を速了し、西洋風の論者を改進的とし、日本風の論者を保守的とし、日本風の論行はるゝ時は改進止めりと思ふものこそ憫然なれ。而して、此思ひに惑はされて、施政の方針を變へ、教育の方針を變へ、甚しきは傳道の方針を變ゆるものすらあり。何等識見なきの愚ぞ。

反動家、日本論を主張する時に當りて、暫らく彼等と友たるものは、彼等と均しく反動して日本論を主張する彼等が同臭味の人也。然れども、彼等は根本より、日本的を好むにあらず、彼等は反動の為に激して過度の保守論を為せり、彼等、追従家が追々と自黨に向つて追従するを見、中心豈に密かに憂いざらんや。彼等が深夜に理想し密かに希望し賴みとする所の人なきにあらず。此人や、超然の人なり。超然の人は、追従せず、反動せず、一定の主義により、一貫の道を濶歩す。今にして、反動家の此流の人を見るや、心中の友にして、表面の敵なり。保守的追従家いよ〳〵跋扈するに至れば、彼等は此の超然の人に托して、暫らく口をつぐむ。

夫れ、達觀すれば、追従家も無る可らず。彼等は驛馬の如く、郵便脚夫の如し、音信を傳ふるヿ迅速なり、彼等なくんば、速かに眞理を傳達せしむるヿ能はず。而して、反動家亦尤とも無る可らず、彼等は諫官の如し、よく刺激しよく忠告す、もし一々其言を用ゆれば天下亂る、(もし一々用ゆれば彼等は刺激者たらず)然れども、之なくんば、天下亦腐るべし。彼等は一種の防腐劑、一味の衝動劑なり。

而して、一日も欠く可らざるは、夫れ只だ超然の士か、氣、宇宙を呑み、量、天地を容れ、大道の上に堅立し、主義の下に盤居し、一定の方針を理想し、百世の經綸を明劃し、激せずして勉め、迫らずして進み、温厚博愛にして衆惡を包み、久しくして之を薫化し、圓滿完德にして衆善を為し、八面玲瓏として万事に可らざるなし、彼は固より追従家を好むにあらず、然れども之と列せざるが故に之に激するヿなし、之を憫れむが故に之を教へんヿを欲す、一意之を矯め之を補ひて善に用ひんヿを欲す。彼は固より反動家を好く、然れども之を高しとせざるが故に之に同ずるヿなし、但だ其の誤まられ易きを見て之を辨護し、其刺激を歡納し、其僻見を繕ひ、以て之を完全の內に包用せんとす。此故に西洋風の議論熾んな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に當りては、固より其大躰に同意して其短所を警戒せり。日本風の議論熾んなるに當りては、固より其情に同念して其幾分の眞理を顯揚せり。然れど、彼は本來、西洋風、日本風の何れにも加黨するとなし、只だ日本眞正の必要に應ぜんとするもの也。彼は追從家の敵にあらず、反動家の友にあらず、脫然として、超出すると、君子の俗輩を拔くが如し。

流を見て、此は下に流ると云ふは何人も之を能くす、其何處より來り何處にゆき、何處に於て方向を何如にして轉ずるやは、深く察する者にあらずんば明らかに識ると能はず。社會の傾趣向勢を考ふるも亦之に均し。追從の聲囂々たるを聞きて、此に輿論ありとするは愚なり、反動の聲激烈なるを聞きて、實要此に存すとするも迂なり。凡そ活眼あるものは達識なかる可らず、俊傑の量なきものは眞正の事務を語るに堪へず、超然として、濁雲黑雨の上に出でずんば、何をもてか天日を見るを得んや。

此故に、社會の活勢を察せんとする者は、彼の追從家が、何に向つて追從するや、其追從の度大中を去る何程なりやを計慮し、又、彼反動家が激烈の語調を割引し、其眞情の存する所を察し、而して彼は何に向つて何如ほどに反動せしやを權量せざる可らず。既に此等左右兩極に鑑みば、則はち之に似て非なる超然家の言行を此類より識別し、以て其至正至當なる方向に隨ふとを得可し。

井上伯の條約改正論以來、近日、日本風及西洋風の傾趣正に一轉せんとするの現時に至る迄で、三種の人情を三樣の時勢に當鑑して審かに考ふる所あらば、歷々として其證跡を得ん。而して、今や、反動家默し、追從者家窺がひ、ひとり超然家の激訓を想望するの時機正に中する所以の理を明悟すべし。

好人物……女學雜誌第二百三十一號社說

僻人物……同　第二百三十二號社說

完人物……同　〔第二百三十二號 第二百三十六號 第二百三十八號〕社說

趙簡子河に遊んで樂み且つ歎じて曰く安ぞ賢士を得て與もに居らん舟人古乘跪きて對て曰く夫れ珠玉足なし此を去る數千里なるも能く來る所以の者は人之を好むが故なり今ま士足あつて而も來らざるは此れ是れ吾が君之を好まざる故ならずや。

報德訓

二宮尊德先生

在甲州の社友、分部盛之君の高祖父分部小満治君、天保大饑の后二宮先生を訪ひて、治家濟民の事を問へりし時、先生直ちに書して與へ諄々として報德の道を訓へ玉ひたるものを左の一文とす。小満治君大ひに感激し、躬行實踐して家を興し且つ村民に傳へて其衰廢を救へり。今玆、盛之君、此文を携へて上京し、之を印刷に附し廣く同村の人に配與せんとを計らる。僕、多年、尊德先生に師事し深く其敎旨を崇重する者、今ま此文を讀むの榮を得て感喜し、君に請ふて先づ女學雜誌に掲載するは、此文の訓敎を受る人の多からんとを望むが爲也。

巖本善治識

○

父母根元在天地令命。身體根元在父母生育。
子孫相續在夫婦丹精。父母富貴在祖先勤功。
吾身富貴在父母積善。子孫富貴在自己勤勞。
身命長養在衣食住三。衣食住三在田畠山林。
田畑山林在人民勤耕。今年衣食在昨年產業。
來年衣食在今年艱難。年々歳々不可忘報德。

飯と汁木綿着物は身をたすく
その餘は我をせむるのみなり
天つ日の惠み積み置く無盡藏
鎌でかりとれ鍬で堀りとれ

御治世安樂に可暮を不存様に相成、無勿躰事に候。其元は沓に事起る故、愼み專要の旨、銘々承服奉畏候へ共兎角相流れ候哉に付、人々身持分限を辨え申度候。譬ば海に住魚は山にも不登、山に住獸は海にも不入、亦蜆は蛤の明貝得る事を願はす、田螺は螺貝の眞似をもせす、雀は鶴の粧をも羨ず犬は牛の大力を賴まず。假令雖得守事不能故に他念なし、他念あき故に生涯居住を失はず。然者甲州郡内上暮地村、高百八十五石三斗五升九合、家數百八十五軒に割、壹軒に付高壹石壹合九勺四才に當る、則是天性自然也、其餘は合稼の潤澤たる由緣を知り、天道の正理を恐れ、各々本業を盡し、御百姓相續いたし度事に候。天道の御授の分を失へば、貧苦に陥り、艱難を免れず。其根元を案るに人皆天地の間に生じ、天地の潤澤を得て、天地の間に住しながら、何ぞ天地に隨はざるや。彌愼み守る時は安樂自在を得る事疑ひ有べからず。

元來難村取直の儀は、尊卑の差ひは有之候へ共、銘々農業をいたし候同樣の儀、譬ば善種を蒔候へばとて耕し耘らざれば穀物實法らず、終に亡所と成ものなり。若穀を殖し、富永を欲する時は、先づ山林の草木、竹の葉落、塵、芥、河海の藻草、萍、鱗、田畑諸作物の殻、雜穀の荒糠、石灰、燒灰、竈の焚灰、酒糟、醬油粕、魚油粕、人糞、馬糞、風呂湯、洗流し、其外惣て不用の品物、不浄に歸する時は肥と名附け、是を集めて能く養へば、直に清浄と變じ、有用の米、麥、雜穀、野菜、藥品、染草等に至るまで、土地より湧き出候なり。其品先づ天地の神佛に供し、致二貢納一、父母妻子眷屬を養ひ、いつの昔より今に至るまで、代々相經營候通りに候。農民は不浄を以て清浄に替ふ、此趣法は人の憂を以て幸に替え候迄の事に候、倩盛衰を案るに、富者の弊は驕奢華美、貧者の弊は窮乏怠惰、此二つの弊を集めて、施す事を知らざれば、田畑諸作蒔捨同樣、困窮艱難に陷り可申候。彌々舊復を願はゞ、富者は驕奢を省き、其財を施し、貧者を爲致勸農、驕奢窮乏の兩弊を集めて、報德金と名附け、年々繰返し、無利息に貸付け撫育いたし候はゞ旱田に夕立をそゝぐか如く、其德たる事豐熟の田を見るが如く純熟可致候、書經曰若稽二古帝堯一曰放勳欽明文思安々允恭克讓光二被四表一格二于上下一克明二俊德一以親二九族一九族既睦平二章百姓一百姓昭明協二和萬邦一黎民於變時雍と謂り。爰に良田ありと雖も、耕さゞれば草原に近し、雖レ耕不レ種ばまた然り、雖レ種耘らざれば又々然り。良田豐熟して實法を得とは雖も、譬ば一反の實法を一人にて喰ひ十反の實法を十人にて喰ひ、百反歩の實法を百人にて喰ひ、讓り施す心なければ、草木にひとし、一草生じて一草花吹き實法る、百木生じて百木花吹き密法る、草木生るゝより以來、讓り心施すなき故、君臣父子夫婦兄弟朋友の親みなし、元來人たるの道は仁心に發り、義禮に開け、智信に止る、我朝天祖天孫以來、唐土堯舜の御代とても同一也。何の比より上奪して無益の利に流れ候哉、讓て有益の天理を失ひ候也。今爰に天地開闢して、草原に一人生れ、左右に人なき時は、飢て喰ひ、渇して飲み、寒して着、勞して寐ね、覺て起き、天地の性と同躰也、是を名付て仁と云ふ。故に貪る念も羨む心も奪欲も發るべき謂なし、若起る時は、明日の爲に食を求め、明日の爲に衣服を求め、明日の爲

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に薪を求め、明日の爲に井を掘り、明日の爲に田を開き、明日の爲に五穀を植へ、明日の爲に橋を掛け、明日の爲めに船を造り、今日を明日に讓り、今月を來月に讓り、今年を來年に讓り、仁心發の形をなす、是を名付て禮讓と云ふ、人情を合するの道なり、其讓りを受て其恩を知る、是を名付て智と云ふ。彌々恩を知り、其恩を報ぜんと治定する、是を名付て信と云ふ。此五つのもの、雖下民、行住座臥其身を離るゝ時なし、是を名付て五常と云ふ。夫より以來、國家に滿て萬事萬端足り、安樂世界に漂ひ、天下の財寳は不作して出來候樣、前後生じ、勤苦して耕し、五穀を植へ候より、實法を得て、飲食するを樂む樣に成行き、終に自然と小人は仁を施て道を樂み、財を得て樂む方に流れ、中興に及で梁の惠王の時代に、孟子の說に上下交征利而國危からんと謂へり、其人情今離れがたく、智者は利欲を恣にして身を富し、忽ち驕奢に陷り窮するもの多し。貧者は素より窮す。是を以て之を見れば、智者は奪ふ、富者は奢り、貧者は羨む、此煩腦を去らずんば、村柄立直し繁榮の道無之候。然ば天理を承諾して、實事を行ひ施さんと欲する者は、先づ田畑一反歩切開き、一反歩の實法を得て、其中半を喰ひ中半を讓り、百反歩切開き、百反歩の實法を得て、其中半を喰ひ中半を讓り、如此各々讓る時は、凡夫といへども聖人に等し。能々奮發して勤行いたしたき事に候。

故道に積る木の葉をかきわけて
天照神の足跡を見舞

先君樣御詠

身にかへて常盤にぞ思ふ萬づ民
所を得つゝとみ榮ひねと

斯被遊候御意、目當なければ成就不致候間、克々天理を辨へ申度候。

今爰に貧者あり、飲食を足せば衣服を好み、衣服を足せば住居を好み、住居を足せば器物を好むなり。又爰に無祿の者あり、一石與ふれば十石を願ひ、十石を與ふれば百石を願ひ、百石を與ふれば千石を願ふ、終に驕奢に流れ借財生じて、元の困窮に陷り難澁致し居候、人皆家祖以來幾千萬歲を相經營み居候間、或は凶荒饑饉、或は水難、或は病難、其他不慮の天災來りて臨時物入等、皆天の便然の處に候へば、可屬身の至極なり、然ば衣服飲食居住音信贈答まで、天命に基き讓り候

はゞ、大半窮迫を免れ可ㇾ申候。若難免時は、田畑山林家財衣類諸道具迄賣捌き、貧苦艱難の憂を去り、父母我身を勞せず古に立戻り、家祖の業を行ひとせば、生涯窮迫を免れ、富貴安樂自在になる事疑なし。然るを古を辨へずして、或は家風、或は仕來りなど申双べ、一度は他借を以て我意を押張り其次は質物高利の借用を以て押張り、其次は非道の金銀を以て押張り、天の命ずる所の福祿財寶を利足賄賂の費となし、煩腦に漂ひ時日を送り候内。古借と唱へ、元金返濟樣の事は夢にも思はず、今日の露命にかゝはり候杯と強勇に募り虎狼の振舞、剩へ貸方催足の過失を探り申爭ひ初發の約諾を違ひ、實意を失ひ、大恩を忘却す、是故人力天命に覆れ候を不知して、困窮と名附、心身を勞すといへども其甲斐なく、家株一倍二倍詰り幾倍に及て分散いたし、子孫永久に憂を殘す者間々有々、淺猿しき事にあらずや此段堅く相愼申度候。聖語曰不ㇾ知ㇾ命無ㇾ以爲二君子一也、不ㇾ知ㇾ禮無ㇾ以立一也と宣へり、所謂命とは、自然に生れ得て受たる分限なり、禮とは自然に受得たる處の分内を讓り施すの名なり、前に申す如く、山に生たる猪鹿猿熊は、山に生じて、生じたる處則ち天命なり、海に生ずる鯨鮫貝類は、其生じたる所則天命なり、雖ㇾ然大體を得たるものは、大體に任せ、小體を得たるものは、小體に任せ、角あるものは、角あるに任せ、牙あるものは、牙あるに任せ、其受け得たる所の力量を以て、己が口服に養ふ、されども禮讓はなし、人も皆其道理にて、異國に生れたる人は、異國に生れたる處則ち天命なり、夷狄に生れたるものは、夷狄に生れたる處則ち天命なり。天朝に生れたる人は、天朝に生れたる處則天命也。然ば百物百家皆然り、男は女を愛し女は男を敬ひ、依て男女和合して子孫を生ず。富は貧を救ひ、貧は富を親み恩を謝して、貧富相和して財寶を生ず。是皆天地の然らしむる處。速かに浮世の雲迷の夢を覺まして、日月の明鏡を拜し給はゞ、父母祖先の大恩身心骨肉に徹し可ㇾ申候間。能々御勘通有之度候處、是を安く飮み、安く食ひ、暖に着て、空しく年月を費し申間敷樣いたしたく候。

在ㇾ明二明德一

豐蘆の深野が原を田となして
食を求めて喰ふ樂しさ

在ㇾ新ㇾ民

田を開き米を作りて施さば
　命あるもの皆な服すらん

在レ止ニ至善一
　田を發し米を作りて讓りなば
　　幾世ふるともこれに止る

先祖德
　昔し蒔木の實大樹となりにけり
　　今蒔木の實後の大木よ

丹精不知八草木無油斷
　丹精は誰しらねどもおのづから
　　秋の草木のみのるかづ〳〵
　春は花秋は紅葉と夢うつゝ
　　寐ても覺めてもあり明の月
　桃櫻は重山吹にまさるらん
　　只賴母しき稻の花なみ
　忘るなよ田畑木こり場家やしき
　　喰ふと着るとは一日なりとも

年歲凶豊在レ天不レ在レ人
土地貧富在レ人不レ在レ天

小説

夏草

第三回

無名氏譯

吾駒は主を殘して恨みを夏草の香にとゞめ、吾心は憤りに狂ひて山杜鵑の音をのみぞ鳴くらむ。せきとめし夏の小川の夕暮の水瀬もなどかアドニスの胸の思ひにまさらめや。

うせたりし戀しき人の面影の、ちらと草間に見えしより、ビナスは胸も飛び立つ斗り。拔足差足進み寄り〳〵、蒼ざめたりし顏色も茜さす朝日の如く、眞紅に燃ゆる頰の火や、炎えては一足、二足三足。戀しと思ふ戀人の座りしまへに跪き身を二ッに折なして、右手と左手にアドニスの床しの帽と花の頰、ふれしやさしの手の痕を、かの雪山の谷の間の白く映ろへる風情あり。

さても床しやと心に視るはビナスの眼のあやまりか。目に見て視ぬはアドニスの心の中のあやまりか。一年三百六十日、かれは戀ならで夜も明けじを、これは戀すてふ名も嫌ふ、そのかたくなの一徹者。あはれビナスの心の底は、しぐれ〳〵

てぬれ勝る、眼に一滴の花雫。漸くしづかにアドニスの手を取りて立上る、雪の牢屋に一輪の百合を籠めたる其風情。かなたこなたの心と心、かの葛の葉の裏表、いづれをいづれといひ難き、花の姿の敵同士。敵も味方も白妙の、蘭麝の香りに匂ふらん。ビナスはふと横向いて、ホンに〳〵美しい姿もあればあるものよと、いへばかなたは苦々敷、エヽこの手を放さぬか。何故余の手に觸れるのぢや。何故じやといふて、何故じやといふて、先づ妾の心を御身より、放さんせ〳〵。そのかたくなゝ御心の妾の胸に響いては、どのよにつらう御座んしよう。エヽ聞くまい〳〵。さア其手を放さぬか。今日は一日當が外れて、馬迄にがしたは誰の罪。エヽ一生の賴みだから、これで余を歸して呉れ。どうしたら馬を得られうかと、たゞ其のみが今夜の氣掛り。エヽそりやあんまりといふもの。サア戀なればこそ、馬も逃ぐれ。あの大海でさへ底あれど、戀には底のないものを、尤も〳〵、馬の逃げたは尤もじや、尤もじや御座んせぬか。ハヽア讀めた、讀めました、大方御身の御心は、知らず嫌ひとやらで御座んしよう。朧月夜か雨の日に一目か二目見たのみで、戀てふものが讀めるなら、三五の夜にはどのように、戀知り人が加へるやら。目に見るのみが戀ならば、なまじひ戀は知るまいもの。思ひの寒の三十日、さむい〳〵といふものが、戀の火にあたらいで、どの火に其身を炎さうか。さア馬の逃げたのは妾がわるう御座んした。御身の言はるゝ御言葉は、一々無理とは思はねどようく考へて見やさんせ。馬じやとて、戀しと思ふが無理かいな。なにもそのように戀といふ、一字がわるうは御座んすまいにと、地をたゝいて泣き入れば、余や戀などは知りませぬ。また知らうとも思はねど、熊ならば一ツ狩をして、見ようといふ氣は御座る。性根が借金の嫌ひな男。戀の借金をいたしても、返されぬことは万々承知。余の戀といふ戀は、こうゆう戀じや、戀が嫌じやといふ戀じや。このよな若い年をして、仕立きらない着物のように、花もまだ出ぬ蕾のように未熟な者が戀すといふては、人が聞いて笑ふまいか。知らぬかや千里を走る駒といへども、之をやしあふに道ありと、昔の人がいふたでないか。サアこのよなつまらぬ話を止めて、別れた方が上分別。エヽ放さぬか。其手を放さぬか。見せかけ斗りの涙と追從は、こぼす斗りが御身の損。胸が堅いとい

ふたらば、どのよな者でも通らぬ〳〵。エヽ嘻しや。物はおつしやらぬ御身かと思ふたに、偖は御身が言はぬのか。妾が耳の聞えぬのか。ハヽア何といふよい御聲ぞ。とりや御聲を聞たい爲め、餘計に迷ひが増して來た。天に鳴り響く絃聲を聽くかと思ふ責言説。耳にはうれしい琴の音よ。胸にはいたむ言葉のふし〴〵。よしや妾が盲目でも、この耳さへあるならば、御身のすゞしい無限の聲に、戀することで御座んしよう。よしや妾が聾でも、花の御身の姿をば、此身の眼に見て取て、戀することで御座んしよう。よしや目も視えぬ、耳も聽えね、御身に觸れて戀やせむ。よしや〳〵視ることも聽くことも、觸れさはることさへも、出來ぬ妾であるならば、御身の顔の花の香を、嗅でも戀はするものをと、聞いてアドニスは口を開き、何をか言はむとする樣は、かの朝照の舟人に嵐を敎ゆるごとく也。

月冴ゆる夜や狼の、一聲高く吠ゆる前、先づその口をわくごとく、吾戀人のあやしげの前兆を見て取るビナスには、言葉を耳に聞く前に、ヅッしと胸にこたゆる思ひ。さても一目に戀の命。もろくも後ろにがッくりと、草村ふかくたほれ伏しぬ。

心一徹のアドニスは、ビナスを死せりと思ひけめ。あはれもろくも見せたるは、ビナスが戀の巧みなり。吾心のつれなくて、殺せし花の屍を、いかにもして愈さむと、額を撫でつゝ頬を摩りつ。百計こゝに盡果てゝ、最後の果に花「キッス」ビナスは巧みの圖に當り、心の底に微笑みて、起き出でざるぞ、いぢらしき。

哀し〳〵の心の闇も、はや明け切むる胸の空〳〵。ビナスは漸く眼を見開き、見るや日の出の朝霞、たなびき渡るごとくなり。二人は合せたる例なき眼をはたと合せしが、まぶちに浮ぶ花頭、ビナスの思ひやまさるらむ。喃、こゝは何處で御座んすへ。とりや天か地か。火水の何か、今打つ鐘は朝のか夕か。死だが益か。生きたが益か。妾は生きてゝ御座んすわい。イヤ〳〵死でゝ御座んすわい。こうして居るのが其ならば、死でいるのも生きたと同前。エヽむごや、御身は妾を殺さんした。サモもう一度殺さんせ。エヽこのあはれな一寸の胸の思ひはどのように、苦しい事で御座んしよう。この苦みの愈ゆるには、永く「キッス」をしたがよい。あれあの紅の

口唇の、少しも勞れを覺えぬ程に、一千度はおろかなこと、二千度三千度、何たる花の妙藥ぞと、いへばアドニスは立ち上り、これようく聞いたがよい。どのよな戀か御身から、借りた例があるあらば、余の身にもなッて見よ。年まだ若き蕾の花を、時節も春も來ぬ中に、咲けとは無理であろうぞへ。はやとッぷりと日も暮れて、あれ聞えたか梟が鳴く。羊も鳥も歸ッたは、大分時刻が遲いのじや。あの烏婆玉の黑雲が、眞赤い空を覆ふたは、早く歸れといふしるし。いざ別れんと御身より、たッた一言いふたなら、御身の所望の一度の「キッス」、其時こそはかまいないと、聞くよりビナスは身も震へアドニスが言ふより早く進み寄り〳〵、いざ別れむといひさして、花に迷ふ風情ぞあはれなる。

天つ香にゝほふ吐息は夏の夜の〳〵はなの「キッス」のいのちかも。さきみだれたる野花のつゆに醉へるすがたや夏の夜の花の「キッス」のふぜいなるらむ。くさむらの深みにまよふはなの精。そもせんきんとは誰がいひけむ。

あはれよ、凍れる白蠟も遂には溶けむごとくにて、心一徹のアドニスは今や爭ふ力なく、刺棘をとりし薔薇の花の、慣れ易くぞ見えたりける。ビナスも今は留めかねて、花の擒のいふが儘、別れを告ぐる言葉さへ、戀の一矢の「キユーピッド」喃戀人、御身のことが氣掛りで、今宵はろく〳〵目も合はず哀しみ明すで御座んしよう。サア聞して下さんせ、明日はきッと逢へましよか。いや〳〵明日は逢はぬ〳〵。明日は友達と連立ちて、雄熊を狩りに行くのじやもの。エヽッとばかり蒼ざめて、ビナスは總身をブル〳〵〳〵。幽朶も戰へ確乎と、抱き留めたる一念力。チエヽ放さぬか、面倒な。何故そのようにとめるのじや。そりや聞えませぬ。サア留いで何とせう御身は何といはんした。明日は雄熊を狩るのじやと、言はんしたではないかいな。エヽおそろしや〳〵、とぎ澄したる鎗先で雄熊を刺すのじやないかいな。あの雄熊といふものは、音に聞えた猛獸よ。たとへ獅子なりと虎ありと、ちッとも怕れぬ荒魂膽。さればいな、そのよな御身の顏じやとて、大事に思ふの何のといふ、ことはちッとも知りませぬ。これはこれはと世間の人があやしむ程の御身の姿。そのやはらかい手もやさしの口も、珠のような眼さへ、かの牧場を荒れ廻る、心と一ッで御座んしよう。エヽおそろしや〳〵雄熊なんぞは

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

狩るまいもの。そのよな愚かな獸類が、なんで美しいといふことを、知ろう筈が御座んしよう。わざ〳〵雄熊を狩ろうとは、そりや身も魂もたまらぬわいな。エ、惡い事は申さぬ程に、狩らねばならぬものならば、もそッと和しい獸類が、どく安心でよかろうもの。エ、くど〳〵しい、いふまい〳〵。御身の御蔭でどのように、遲くなッたか知れぬわい。エ、そりやまた何故で御座んすへ。余の家には朋友が今か〳〵と待てゞあるに、このように遲い夜道では、足元知れぬ眞の闇。さればいな、もしも闇路に轉ばんしたら、大地が御身の足音の戀しうて〳〵「キッス」の爲じやと思はんせ。現在自分の眼の前に、寶の山があるならば、隨分正しい人でさへ、盜み心が出勝よ。あのおとなしい「デャン」さへ、御身の姿を目に見ては、「キッス」を盜んで地獄の底へ、落ちまい事か〳〵あれ〳〵この黑闇を何と見さんす。あれあの天つ風吹き通ふ、ほとりに行て「ヂーチュア」の、盜み來りし御身のすがた。その花盜奴の罪に遇ふ、その刻までは「キンデア」が桂の影のかくしだて。天の怒りもかまはいで、作りし御身の姿には、光のどかな日も月も夜晝恥てゞ御座んしよう。されば

そのよな美しい、ものをこの世に作ッては、天に怕れがあるわいと、かの「ヂーチュア」が運命に、賂ひ事して美しい中にも是世の塵を混ぜ、不幸薄命とやらいふものゝ、無殘たらしい足下に、置いたといふではないかいな。熱や寒氣や百病の、血につきまとふと同樣に、この世の中にうつくしい、物には悲哀よ失望よと、それ〳〵あはれな「自然」の細工。ことにうつくしいといふたらば、あはれ蜉蝣のまたゝく命。朝日に消ゆる白露の、もろい風情で御座んしよう。まだ聞えませぬか、實のない花は、咲くにも獨り散るにも獨り、獨りで咲いて獨りで散て、さむしい事ではないかいな。エ、御身もその通り、みづから自分の墓をほり、望みと共に沈んでは世間の人が之を見て、何たる恥といひましようと、いへばアドニスは首を打振り、偖は戀が二千枚、三千枚といふ舌を、御身に貸して一枚が、その御身の舌よりも巧みに動くといふたとて、余の耳には一聲も、けがれたものは通らぬ〳〵。アドニスは戀を嫌ふと申さねど、御身のような見せかけの戀は性來大嫌ひ。逢ふ人ごとに手を取るような、そのよな情慾の奴隸となッて、どんな理屈があろうとも、そりや戀でなし、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

戀でなし。戀といふものは、色情が是世に顔を出してから天つ邊に逃げのびて、影をかくしたと知らぬかや。戀は雨後の日影のように、樂しいものを色情は、日の照る後の風雨も同前。戀のすゞしい春風は何千年も吹くものを、あの色情といふものは、夏の半ばもすぎぬうち、はや北風の吹いたと同前戀に食傷はなけれども、色は死出路の饗應よ、戀は眞正いつはりなし。色は虚欺のかたまりじや。エヽもう何もいふまい〳〵、こう男をけがしては、どの顔がわッて歸られうかと、いひつゝつッと身を放し、暗き闇路をたどる〳〵、吾家の方へと歸り行く、後姿に照る星や、ちらり〳〵と打護る、女神の戀の眼をぞ、導くよすがとなりにけらしな。

雜録

獨嘯偶錄

是空子

(一) 幼な兒、知らず

われに二人の兒あり。長けたるは二歳、此頃は獨り立ちて歩み亦た遊ぶヿを得。幼なきは、未だ滿一歳に至らず、臥したる時、獨り起反るヿすら能はず。長けたるは、姉にて優しき性質なり。或日、弟に行水せしめたるに、弟甚はだしく泣きしかば、彼女涙を落して煩悶し、衣物を持來りて早く着せよと云ふ。平常大率ね斯の如くなるに、彼の洋人某が言ひける如く、幼兒は殘酷なるヿを好むの天性のあるにや、或時、弟の顔をかきむしり、其の悲し氣に泣くを不審氣に打笑みて見てありき。弟は、只だ泣くのみ。一言も之を訴ふるヿ能はず、敢て禦ぐの術を知らず、只だ〳〵泣くのみにありき。近頃ろ、此弟、微しく病む。熱高くして、苦し氣なり。但だ僅かに苦痛の少間隙を得れば、則はち莞爾として笑ひ、亦乍ちにして、苦喚す。之に問ふに、何處の苦しきやを語るヿ能はず、之を撫するに、何處の快ちよきやを謝するヿ能はず。藥を水として飲み、飲みて悶え吐く。之に說いて之を勸めん術もあらず。あゝ、彼は、泣けども聲なきに均し、彼に父母あれども何如んともするヿ能はず。彼は一種の啞なり、彼は或意味に於ての孤兒なり。

其親なる人、此等の狀を見て、悲歎遣る方なく、或時は其痛

ましきに腸を絞り、又或時は、其情けなきに胸を打ちぬ。而して後ち、つく〴〵と觀じ、互ひに語りて云く、あゝ〳〵、吾兒ひとり斯の如くなるにはあらず、天地の人實は皆な斯の如くなる耳。吾輩知らずして人を害すると幾千ぞ。吾輩獨り苦悶して泣き、其故を知らざると幾千ぞ、と。

暫らくして亦辨じて曰く、左れど、吾兒に其親の看するは、天則の一微光ならずや、吾輩無智の人の上に、智德圓滿の天父ありて、吾輩を愛護し玉ふものなからずやと。

（二）懺　悔

噫、嗚呼、之を何ものに訴ふべき、野の草は互ひに磨して音を發すれども、余は之に語を寄すると能はず。稲田の眞穗は、風にゆるぎて招けども、余は之に親しみ近づくと能はず。蟋蟀の歌ふ、轡虫の吟ずる、余が爲めに慰さむとしも聞えず。半月、雲に姿をかくせど、余が心の曇りに同情を表すとは見えず。激浪怒號してなぎさを破れど、余が心の鬱結せしを聞かんとはせず。朦朧として遙かに光る、海中の霧の間ひの燈明臺、一線を發つて吾が胸裏の良心に入れ、戒しめて云く、君何んぞ奮はざると。

則はち起つて猛然たれば、雲ひらけ、月照り、風景一變す。濶歩して行くと數間に過ぎず、吾が孤影を眺めて既に悄然、全身寂寥を感じて亦外に求めんとす。噫、嗚呼、われ、之を何ものに訴ふべき。顧みて後へを窺がふ。月かくれ、風景再たび暗澹たり。

余、吾に問ふて曰く、汝、何をか求むる。吾、余に答へて曰く、判然として明答す可きものあるなし、只だ足らざるとを感じて而して其何ものゝ足らざるかを知らず。余、吾を詰りて曰く、欺むく勿れ、汝が求むる所ろ既に明了々にあらずや、但だ汝之を考慮せよ、汝之を得て抑そも何如んせんとす、汝之を獲て果して之を用ふるとを得る乎。吾惑ふて答ふらく、如何んせんとするかを思はず、何如に用ひんとするかを計らず、只だ之を得んとを欲す、之を得たりとすも、之を所有するとを得じ、然も倘ほ之を所有せんとを欲すと。余、罵りて曰く、之れ癡なりと。吾倘ほ恥づると能はず、自語して曰ふ、罵る所ろのものは、吾が同身の余なりと。

忽焉として悟る、あゝ、吾は愚なりき。

忽焉として亦悟る、あゝ、余は忘れたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

抑そも、余は何ものぞ。余が眞誠に樂しむ所ろのもの、何ものぞ。余が尤とも安固に安んずる所ろの何ものぞと。

むかし、アウガスチンは、昏睡の人覺めんとして又眠るに比へ、ポウロは我心に二の法ありと言へり、あゝ、われ何の故に斯く戰ふか。

此の死の軀より吾を救はんものは、たゞ基督也。

三日幻境（下）

透谷子

むかしわれ蒼海に同に彼幻境に隱れしところ山に入りて炭燒薪木樵の業を助くるをこよなき漫興となせしが又た或時は彼家の老婆に破衣を借りて身をやつしつ炭賣車の後に尾きてこの市に出づるをも樂しみき。

斯る無邪氣の勞力をもて我はわが胸中に蟠りたる不平を抑へつ、疲れて歸る夜の麥飯の味今に忘れず、老畸人わが往事を說きて大に笑ふ時われは頭を垂れて冥想す。昔日のわが不平幽鬼の如くにわが背後に立ちて呵々とうち笑ふ。遮莫わがルーソー、ボルテイアの輩に欺かれ了らず又た新聞紙々面大の小天地に翱翔して局促たる政治界の傀儡子となり畢ることともなく己が夙昔の不平は轉じて限なき滿足となり、此滿足したる眼を以て蛙飛ぶ古池を眺る身となりしこそ幸ひなれ。

余は八王子に一泊するを好まざりしと雖老人の意見枉げ難く止むことを得ずして俗氣都にも增せる市塵の中に一夜を過せり。明くれば早曉羈亭を出で馬車に投じて高雄山に向ふ、この時のわが口占は

　すゞ風や高雄まふでの朝まだち

路に梭の音の高く聞ゆる家ありければ眼を轉じて見るに花の如き少女ありて杼を用ゆること甚だ忙はし、わが蓬萊曲の露姬が事を思ひ出でゝなつかしければ能く其面を見んとするに馬車は行き過ぎてその事かなはず、彼少女が窻の外におもしろき花の咲るに心づきて其名を問ば銀草なりと言に、少女の風流思ひやられて句一つ讀みたれども難あれば載せず。

琵琶瀧より流れ落つる水のほとりの茶亭にて馬車に別れ、これより登り三十八丁、といふも靈山の路は遠からず。道すがら巢林子の曲を評しあひ、治兵衛梅川などわが老畸人の得意の節おもしろく間拍子とるに歩行も苦しからず、蛇の瀧を

も一見せばやと思しが、そこへも下ず巖角に憩て清々冷々の玄風を迎へ、體靜かに心閑にして冥思を自然の絶奥に馳せて聊か平生の煩羅を洗ふ。　幽山に登の興は登つきたる時にあらず、荒榛を拔き峭嶢を陟る間にあるなり、榮達は羨べきにあらず榮達を得るに至るまでの盤紆こそまことに欽すべきものなるべし。

頂上にのぼり盡きたる眞午の頃かとぞ覺えし、憩所の涼臺を借り得て老畸人と共に縱まゝに睡魔を飽かせ、山鶯の聲に驚かさるゝまでは天狗と羽を幷べて象外に遊ぶの夢に餘年なかりき。

この山に鶯の春いつまでぞ

とはわがねぼけながらの句なり。老畸人も亦たむかしの豪遊の夢をや繰り返しけむ、くさめ一つして起き上たれば冷水に喉を濕るほし眺めあかぬ玄境にいとま乞して山を降れり。

琵琶瀧を過ぎ、かねて聞く狂人の樣を一見し、かつは己れも平生の風狂を療治せばやの願ありければ、折れて其處に下るに、聞きしに違はず男女の狂人の態見るもなかく\に凄くあはれなり。　そが中には家を理するの良妻もあるべく、業に勵むの良工もあるべし戀のもつれに亂れ髮の少女もあらむ逆想に凝りて世を忘れたる小ハムレットもあらむ。

われを見ていづれより來ませしぞと問ひかけたる少年こそは狂ひて未だ日淺き田里の秀才と覺へたり、世間眞面目の人眞面目の言を吐かず、却つてこの狂秀才の言語尤も眞意を吐露すらし。われは極めて狂人に同情を有するものなり、かつて狂者それがしの枕頭にあること三日己れも之に感染するばかりになりて堪へがたかりし事ありしが、今も我は狂人と共に長く留まる事能はず。　琵琶瀧はさすがに靈瀑なり、神々しきこと比類多からず、高巖三面を圍んで晝なほ暗らく、深々として鬼洞に入るの思ひあり、いかなる神人ぞこの上に盤桓してこの琵琶の音をなすや、こゝに來てこの瀑にうたれて世に立ち歸る人の多きも理とこそ覺ゆるなれ、われは迷信とのみ言ひて笑ふこと能はず。

こゝを立ち去りてなほ降るに、ひぐらしの聲涼しく聞えたれば

日ぐらしの聲の底から岩清水

この夜は山麓の羈亭に一泊し、あくる朝連立て蒼海を其居村

に訪ひ、三個再び百草園に遊びたることなどあれど記行文書きて己れの遊興を得意顔に書き立つることと平生好まぬところなればこゝにて筆を擱しぬ。

文學者と愛獸

われらの記臆に求め難き頃より、文學者多くその愛獸をもてり。あるものは家畜を愛し、あるものは野獸を好み、金玉の詩歌を詠じて多くかれらの愛すべきをいへり。蓋し有名なる文士等がかれらあはれむべき獸類を愛せしよしを記すこと、われらにとり是の上もなき一の樂みなりとす。そはかの天與の詩才のこゝに觸れて、われら凡常のものをして自然に接せしむるのたよりとなればなり。

古來文學者の愛したる畜類のうちにて犬に越へたるはあらざるべし。ギヨエテは自然を愛すること深かりしに、いかなれば犬嫌ひの目を立てゝ、かれの無邪氣なる姿をいやしみけん、スコットは最も犬を愛撫してその行くところには常に二三の愛犬を伴なひしといへり。

スコットは又猫を愛す。暖爐のほとりに主人を待てる獵犬メイダ机上に戯るゝ愛猫ヒンゼと、ともにかの「ローマンサー」(小說家)が忘れがたき愛著を引きしといふは世に著し。

スコットのメイダに敵すべきは、かのバイロンのボーツエンなるべし。かれはその愛犬を「ニユースタッド」に葬りて、これが爲に一篇の碑文をつくりしが、

このほとりに葬むれるは美ありて浮華ならず、勇ありて高慢ならず、人の德をあつめてその惡を去れるものゝ遺骸なゝとむ。この贊詞をして人間の白骨に寄するものとせば、いたずらに無稽なる諛辭となるらむ。しかれども千八百三年「ニユーホンドランド」に生れ、千八百八年「ニユーステッド、アベー」に死したる予が愛犬ボートエンの記念として、予はこの辭の過ぎたるを知らず。

この碑文のおはりには年少詩人に過ぎたる程の憂鬱なる一句を詠じたり

一友のなきがらを記念せんが爲にこの石あり、

予は一人の外に友といふものを知らず、あゝ

その一人はこゝに横はれり。

バイロンが獸類を愛したるは其趣味いたく他の文士と異なれるところあり。かれの「ケンブリジ」に赴きしとき、二犬一熊をともなひしことありしを、ある人いかなれば左る獸類を伴ひ給ふやと問ひけるに、かれは予の友人なりと答へしといへり。このおそろしき詩人が晩年落膽のさかひに居りしころ「ニユーステット、アベー」の門口に狼を置きて家の守りとなせりといふ。この人にしてこのことあるは、むかしの程もしのばれていとおかし。

詩人クーパーは深情の人なり。さればその愛するところも多くして、最も人に知られたるは彼の兎を愛せしといへることなり。主人に代りて水中の紅をとるといふ獵犬の外、「ギニア」の豕、その他諸鳥のごときもこの詩人の爲に愛撫せられたりといへり。かれが日靜なるときこれらの愛獸の爲に佳什を吟じたるを讀むときは、詩人が想中の靈火あはれなるを認むべし。

ポープは犬を愛し、サウゼイは猫を愛す。「チッケンハム」の俗人といはれし詩家さへも、その愛せしボンスをば花園のうちに葬りしといへり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

論説

坐禪の辨

天知子

（一）先づ字義を讀むべし

專門の用語は其意味の他に何となく一種の臭味を同伴し來るものなり、坐禪の如き亦其一か。固より梵語の娑摩陀、禪那等の譯字にして、佛家の語なれば僧侶の專有物たる感覺あるは理由なきに非ず、然れども坐禪或は禪定の語を譯する時は默考修德或は靜慮觀念と成るなり。

坐とは禪行に正坐するが故には非ず、善惡混亂の誘惑多き人世に居りて道の上に安坐して信念動せざるの謂なり。禪とは外界包圍の事物及び境遇に制せらるゝとなく靈眼一注して一心亂れざるの謂なり。短言せば一心のとなり、換言せば人工的の才學思慮に據らず、浮世的の輕浮心を撲滅して靈才天智を發起せんとの修道意義なり、吾理想たる心眼明達の天知を修養するの義にあるなり。

坐禪は古代より諸所に行はれたる修道法なり、香至國の菩提多羅說て曰く、諸の動定を離るゝを大坐禪と言ふ、凡夫は一向に動ずるに失し、道士は一向に定（心亂れざると）に失す此凡夫禪、小乘禪を通過せしを大坐禪と稱すと、佛家尙種々に區別して細論すれども敢へて揭ぐるに要なからんと思へば省きつ。

（二）次で修行の着眼を見よ

禪定の修行は意志を强健にして感情と智力とを壓服し、全身唯一心と成らんを勤む、已に一心と成れば即ち無我たる無心と成る而して無念無想と成るに習慣着けるものなり、換言せば未だ磨かざる天賦大樸の人類思想を――嬰兒以來の智力を琢磨開發して僅かに收獲實入したる（理性的にあらで）我れといふ度合の裸躰なる人類思想を――勃發せしめて、心といふ大問題を心自らに硏究せしむるものたり、故に一種の心理學修行にして、其關係の及ぶ所哲學の範圍に入込み、又一方に及ぼす所宗敎の範圍に入込む、此三學を兼修せんとするもの是れ禪宗の野心なりき。

彼れが說く所に由れば、禪觀の正路は無明を斷ちて思惑と見惑の障害を除き能く色と心との二法を觀察するにありとす。且其心理說を案ずるに、人には五官の觸識と、種々分別する

意識と、自他の分を知て內外の法を現ずる末那識と、万法を含藏する阿賴耶識との八識より成るといふ。而して阿賴耶識は心の源にして見惑と思惑の起る所なれば恰もサタンの巢屈なり、故に此朦朧たる虛空中にある明了なる一物を徹底打破せば洞然として道明らかなり、此裏に觀達する時は直に貪慾は慈悲と變じ、瞋恚は勇猛に變じ、愚痴は智惠に變ず、此に至て人の達德なる智仁勇を得るに至るべしと。

斯くの如き說を實驗上研究するの課程を名けて坐禪といふなり、而して此研究の爲めに得る所の副產物──寧ろ主產物──こそ余の最も着眼する所、彼れが法を說くには先づ自ら法と成るべしといふものにして、人物修養の一材料之れなり。

（三）一步進めて其効驗を見よ

意氣沈靜して膽力を養ふ。之れ人物修養の要素にして、禪行之れを能くす。夫れ膽力は信仰なり、然れども微細に觀察せば更に他の一物加はるを知らん、凡そ靈界の無形刺戟に一心動ぜざるものを信仰と言ふを得ば、肉界の有形刺戟に心動ぜざるものを膽力と言ふを得べし。信仰は强健意思を作る然れども又强健意志あらずんば信仰を保持するを得ず、此强健意志を養成するに至ては信仰も膽力も相同じ。信仰は重もに理想より入り膽力は重もに實習より入る、然れども單に理想のみより成りたる信仰は泡沫の脆きが如し、多くの誘惑は實際的に來りて實行の鍛練を與え、始めて强固なるを得るに非ずや、禪は即ち實際的刺戟に實習して一心不亂を修養す、氣丹田に沈みて膽氣飽滿するに至るを得べきは武道修養と同理想とす以て學ぶべく、以て練るべし。

分別判斷を明かにす。坐禪之れを能くするを得べし、百慮を排して唯一考案に工夫する抽象的の習慣より、著しく分別判斷の頓智を養ふものなり、多雜の考へ事に包圍さるゝも、泰然として一々一方より抽出して專念工夫するを得るものなり。

一心一途に注射して亂れず。意志を堅强にして感情に制せられず。空想を制して實行の人と成り。心急激なる性質を緩靜ならしむ。此等は皆修禪より得る結果にして、前に說きたる所を以て見るも其然る所以を明かにするを得べし、殊に神經質を癒するの功驗あるに至ては更に喋々を要せざるなり、而して又心氣を養ひて呼吸を整え、腦病を健かならしめ、胃を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

壯健ならしむるに特功あるとは人の多く證明する所たり。此等の効驗を縷述するに至らずとも、凡そ人は靜慮默念の時を要す、靜の靜、默の默、路窮まりて山生じ川盡る所大海を見る、道の極致を領き天の幽玄を味ふの人物は、實に爰に修養を着目せずんば非ざるなり。

（四）更に進んで基督教師に勸む

青天霹靂を轟かし陸地波濤を起す、大俗の中央に大聖を味ひ熱閙煩劇の中に安息日閑々たり、慣撃突戰の大忘中に劍心靜かに坐禪を修し、寂寞無聲の坐禪中に人間大忘の相を觀ず。多忙煩劇の人世に在る者必ずしも靜慮默念を必要とせば、實に安息日の性質を知るを得べし、安息日は骨休めの日に非ず然りとて此日のみを以て傳道の日とする者に非ず、淸談靜念正に坐禪の日なり。

神聖なる吾基督教徒の過去を默想し見よ、始は偶像教を罵りて祖先の位牌を放下し神佛の木像に溺し、破壞的を唱道して自ら西洋崇拜の偶像的信者と成る。次で我れ救はれたり我れ喜びなりと空笑虛樂し、利己にのみ汲々たる物質崇拜の義なき小人信者を出し。極端なる精神的信者狂激して大波亂を起し、終に大勢一新の氣を吐きて稍々日本基督教の聲を叫び出すを聽くに至る。而して又事業的實行の基督信徒稍々近年に叫び出すに至るべし、何となれば此現象の先導者として人物修養の文字頗る現はれ來るを見ればなり、前途賀すべし喜ぶべし。余は此時に於て坐禪の修道法を注意せしめんとを欲す今日の信徒頗る人物なきに非ず、然れども概して幽凄深重の硬骨多からず、熱烈樸大の舊約人種多からず、偏へに書籍の人に安んじ、才識智能の虛躰に得意たり、正に日本基督教が大坐禪するの機ならずや、先輩の教師先づ悔改めて一大洗禮を受るの時ならずや、讀書的學校のみを以て道士を卒業せしめんとし、理想的傳道のみを以て道を研究せんとす、月給の定價もて神の言葉を買はんとし、先づ衣食の安心を問ふて、神の言葉を賣らんとす、錦襴の道も糞土の口舌より發す、臭氣なからんとするも得んや。現時最も缺けたるものは靈肉併せて工夫鍛練せざるとにあり、坐禪を以て異教徒の修道法と偏斷せば誤なり、舊約時代修道の敗殘法なりと僻見せば誤ちなり、禪宗固より基督教に比すべき程の價値なし、然れども其修養法の宜しきに至ては極めて基督教徒の學ばざる可らざ

るものありて存す。

日本は禪の恩惠を受るもの極めて深し、試みに禪史の潮流に沿ふて日本人物の舞臺を搜索せよ、明かに幽凄深重の一種賞賛すべき者多くを養成したるを見るべし、若し基督教の經歷を以て年代短しとの言ひまいに假托するとも、最早短日月なりと言ふを得ず、豐臣以來已に三百星霜、明治以來已に二十五年、之れを以て尚短しとせば何れの時にか充分なる年代と言ふを得べきか、況んや道に時間なきをや、修法唯迂濶なるのみ、道士尚淺薄なるのみ。

（五）終に坐禪の法方を示す

坐禪儀の正法に從ひ其仕方を述る時は左の如くなるべし。

坐禪せんとするには先づ飲食に過不及なく、睡眠に不足なきよう身躰の調子を整へ、最も閑靜なる場處を撰みて成可く厚く敷物を布き、着物を寛く着て可成身躰に刺戟なきようにし靜かに其上に坐して威儀を整え、更に厚き臀當（羽毛又たはパンヤを容れば最も宜し）を臀下に當て、而して後に心を鎭め氣を穩かにし、跏趺趺坐（後に解釋す）又は半跏趺坐（同上）を爲す、婦人の如き趺坐に堪えざるものは安坐（同上）するも宜し、斯くして徐かに身を前後左右に反復動搖せしめ背梁を直立して臍下に稍々力を滿たし、前に踊り後に仰ぎ左右に傾かず、又身を聳つるに過ぎて急要不安のことある可からず、耳と肩、鼻と臍とは各々相對して直線中に在らしむべく舌は上腭を拄へ、唇と齒とは相着けしめ、目を寛く閉ぢ又は半眼を開く。

斯くの如く躰勢已に調へば、臍腹を寛放し、一切の思慮を捨て是非善惡の思ひなく、只管一の公案をのみ鋭意勇猛の心もて思案工夫すべし、禪家にては此公案を漠然たる哲學問題に執る、最も宜し、例へば有無と虚無とに非ざる無を工夫せよ眞空中隻手の音を聽き來れ、橋上に立て流水を見る水流れずして橋流るゝの類之れなり、始め茫漠として雲を爴むが如く、唯己れの學才智識を以て判斷分別せんとする者なり、然れども斯くの如き案の出る內は屢々之れを排棄して再び念頭に置かざらんと欲し、茫然として愈々判斷し難く思慮屈するに至り大暗中に彷徨する如き境に容べし、斯くしてより一層勇猛心を振起して心を皷舞激動し、常に暇あれば永く此念を絕つとなく坐禪すべし、修業時間は普通の仙香一本燃え盡る

を度とし、少しく散步運動しては又坐禪す、後ち進步せば三十分乃至一時間餘を續くるに至るも可なり。用心を疎かにせば疾を惹起すとありと雖ども、注意すれば其恐れなからん、總て用心と不屈の心得は最も大切なるものなり。禪儀に曰く珠を探るには宜しく浪を靜むべし、水を動すれば取と難し、定水澄清なれば心珠自から現ずと。

以上の如くして暇ある毎に修禪し、又は日曜半日を修行日と定め之れを修せば、自得する所のもの少なからざらん、其習慣着かざる始めの内は稍々困苦と倦厭と來るものなれども、修道の人斯ばかりのとに意志を弱むべけんや、暫らくして言ふ可らざる快味生じ、奮勵精進屈撓せずんば好しや頓悟の絶妙に至らずとも、其獲る所極めて多きを知らん、法華經に曰く閑處に在て其心を修攝せよ、安住不動なると須彌山の如くなるべしと。

結跏趺坐とは右足を左胜の上に安んじ、左足を右胜の上に安んじ、右手左足の上に置き、左掌を右掌の上に置くを正則とす。

半跏趺坐とは唯左足を右足の上に安んずるのみ、其他は同し、大抵は此趺坐を用ゆ。

安坐は普通の如く坐して臀部を兩足間に落し、俗アリノトウと稱する臀頭の部分を以て正しく臀當てを壓すように正坐すべし。

批評

○開國始末の書法に關する疑問

在京青年會の發起にて、曩の日、井伊直弼公三十三回忌追悼演說會催ふされ、近日、其筆記非賣品として出版さる。一部を受けて讀むに、島田三郎君が、題號の如き演說の筆記あり開國始末に對する三種の反對論、即はち、内藤耻叟、朝夷知泉、福地源一郎の三氏が反對論に答辨せられたるもの也。十六行三十六字一葉に五十三頁を塡めしたる大演說なるに、論法整然、擧證嚴密にして、一段は一段より、層々として微に入り、緻に入り、時に快論を放ら、時に慷慨を吐き、今日の讀者をして、當日の聽者が、恍目迷耳の態を彷彿として想像せしむ。

内藤耻叟君が、開國始末を駁するや云く、後生少年島田如きに是等の事蹟は分らぬと。島田君の之に對するや、初めは慇懃にして謙退し、敢て當らざるもの丶如し。試みに吾が信ずる所ろを述べて之を解せんとて、一と度び口を開き、着々として自己斷定の理由を辨じ、手品師があとより／＼珍奇の品

を繰出す如く、段々續々として材料を開陳し臚列する所ろ、何如なる老文士と云へども大辟易せざるを得ず。而して、文士の辟易し、聽衆の傾首する度合を見計らひ、ソロ〳〵として敵を苦しめ、他の窮せるに隨つて、追々と之を嘲ける。其嘲けるや、一歩に一閣、十歩に一樓の躰にて、議論の地盤を打かため、いざ確實なりと知られたる地歩に達する毎に則はち敵を罵る也。遂に云く、若し、先生が筆を以て議論に來らるれば私は歷史の事は片手間であり、又年齡は兎ても先生に追付かぬが、文學專門の老人先生に向て一戰するヿを辭さぬ積りであります。

福地君の駁論は、世に多く聞く所ろのものにて、一應は尤もに聞ゆ。而も、此反對論は、井伊公の心術事功を多少承知して、但だ其績を何故、阿部伊勢、堀田備中に分たざるやと云ふにありて、頗ぶる人を動かすの難問たり。島田君、尤とも巧みに之に答え、讀者聽衆を十分に感服せしめ、時分は善しと云へる躰裁にて、則はち例の筆法をもて一輕罵して云く、能く書を見れば此位の事は分りませうが、文章に有名なる福地君が分らんと云ふのは、詰り筆の達者に委せて種々の事に手を着け忙がしいに付て、と。

一度び開國始末を讀みたる人は言ふ迄もなく、井伊公及び開國の事件を念とするものは、是非とも一讀せよ。開國始末出版の當時には未だ公けにす可らざりし材料も此に於て公けになりぬ。材料の確實、撰整鹽梅の聰明なる感服の外なし。島田君自ら云ふ、私はシツコイ性質でありますから是丈で濟すヿが出來ない、と。此の、是丈て濟せぬと云ふ一度胸、つねに君をして材料を綜索し論定を愼重せしむ。

此大演說は、衆議院に於ける君が有名の大演說と日を去るヿ遠からずして起れり。而して、余を以て見れば、後者は一時慷慨の氣を以て之を遣るヿを得べし、未だ必らずしも大に難しとす可らずと思はれたれど、前者に類したる明晰微妙にして而も怜悧敏聰なる歷史上の大演說を爲したるものは、近世に類なく且つ尋常者の容易すく企つるヿ能はざるものと信ぜらる。余大ひに之に服し、世人の後者を賛して前者に冷淡なるを憾む。單に冷淡なるを憾むに非ず、其冷淡なる所以を頗ぶる遺憾とす。

余が井伊公に執る所ろは其果斷なり。、、、、

○排曲學論

佐賀縣平民酒井雄三郎氏が、前後八年洋行留學したる文學士、都筑馨六氏の民政論を駁擊痛倒したる快論、最に國民之友特別寄書欄内に見ゆ。今や多少改竄したる文句と、新命したる書題とを以て一小冊子となり、廣く世に行はれんとす。快何んぞ比せん。

吾黨が此書に感服する所ろのものは、斯る馬鹿氣切つたる愚論を、よくも鄭寧に且つ學者風に斯く駁擊せられたりと云ふの一事なり。必竟是れ文學士たるの尊稱に對しての禮遇なるか、生れて文學士となる亦榮ありと云ふべし。著者其の猛烈の血性を沈め、兆民子に似て、短罵笑倒するの無雜作なるを制し、敢て如此く細論し、彼曲論者の爲に「一條の進路だも存せざるを知」らしむるに至しは何等の勞苦ぞ。君云く、

若し夫れ著者が議論の謬戾卑陋なる固より反駁を加ふるの價値なきとは予初めより之を熟知し而して尙且つ之が駁論の稿を起し由りて以て予が言の甚しく煩冗に渉るの咎めを讀者に得たりとせば予は甘んじて其罪に服せざる可らず。

君が言の煩冗なる所以は、則はち君が尤も勞せし所以なり、かゝる愚論を駁するに、嶄新明哲の利器を用ゆるとは出來まじき筈也。

○日本博士全傳

博文館より出版し、花房吉太郎、山本源太二氏の編輯に係る博士一百二十一名の小傳にして、主も、當人の新知舊識尤も親善なる人に就きて聞草し、尙ほ當人の補正を乞ひたるものと云ふ。中にも、井上哲二郎、高木兼寛二氏の傳の如きは、補正尤とも多かりしものか、別格の長文にして送別の序詩すら揭載せられたり。加藤弘之君の傳に、幼より頴敏一を聞て十を知ると云ひ、外山正一君の傳に、君爲人沈毅寡言と云ひ、末松謙澄君の傳に、平時甚はだ多言せずと云ひ、井上哲二郎君の傳に、ボンネル氏が十九歲一ヶ月の時の井上氏を鑑して、子は希臘の哲學者に似たりと言へりと云ふが如き、讀者をして一笑せしむるものなきにあらず。左れど、四千万人中に於ける一百二十一名と云ふ稀有なる博士の傳記を僅々三百六十三頁の中冊子に於て、如此く簡易に知り得るは、極めて便利なりと云ふべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○明治政史

其第一冊は、前號に於て既に評を了へたり。近日、其第二第三の兩冊を看る。此度は、所々精密なる敍事を加へ、遙かに維新前に溯りて其由來を示し、又は片々を集めて一貫せる道行を明らかにせる所ろ、前冊に優る。就中、經濟上の記事に至りては、ことに密なり。例せば、外國公債募集の始末、舊貨幣改鑄の顛末、藩札當分の事、大藏開拓兌換證券の事、の如きこれ也。されど、又、外交の顛末、高知藩制改革の由來全國幕兵の事、地租改正の事の如きをも精しくしたり。何れも珍らしき材料にあらず、大抵、報告、新聞、逸話記事等を集めたるに過ぎずと云へど、斯く一冊に集輯せらるゝ時は極めて便利なり。但だ憾むらくは、當時の政評として附錄するものに、何故、其新聞紙、著書、又は作者の名を明記し置かざりしにやと思はる。

○勿

中原倘德氏の編にて「勿」と題する書出づ、一名處世之方針と云、蓋「ドント」を譯せし者か、卷末に、各國俚諺集、及格言集を附錄としたり。寸珍百種の第二編としては、重寶の書なり。

摘要

○眞正の善後策は議會解散にあり

經濟雜誌は去廿七日の第六百三十八號に於て、干渉知事の非免を可とし、尙此上警視總監を罷めざる可らずと論じ、遂に曰く、然り而して余輩の見る所を以てするに帝國議會も解散せざるべからざる也、夫れ知事等を淘汰するも衆議院議員を其儘に放置するときは、是れ竊盜を罰して其貨財を官沒するに均し、人民の希望は毫も達せざるなり、其れ人民の知事を怨む所以は、知事が自己の欲せざる議員を選擧せしめたるにあるなり、故に自己の欲する議員にして選出せらるゝに至らば、或ひは知事は從前の如くにても差支なかるべし、然るを若し單に知事を淘汰し議員を其儘に放置して以て政府の味方を爲さしむるときは、新内閣は前内閣の擧措を非なりとし其非を改むると公稱しながら實は前内閣選擧干渉の御蔭を蒙むるものなり、天下豈に此の如き理あらんや、且つ夫れ議場に於ては此等の議員を使嗾して民黨を苦しめながら、單に知事を淘汰して而して民心を得んと欲するが如きは姑息の小策なり、寧ろ男子らしく議院を解散し民心の欲する議員を選出せしめて以て之と共に國事を議するに如かんや、

○死

去廿九日の「亞細亞」第五十四號に、三宅雄二郎氏が、我觀一則「死」の論文見ゆ。一生の覺醒、其の前と後とは意識あることなし、有るなきの境、實に一生の間にして、以て足ることを得ざる所、足ることを此に求めんとする所なり。方さに今覺醒に在り、方さに生の前に在らず、焉ぞ能く生の前を知らん。又方さに生の後に在らず、焉んぞ能く生の後を知らん。然りと雖も夢幻の時にして、猶ほ或は別に覺醒なる者あるを得んことを思ふ、而して果して之れ有り、乃ち孰れか其の觀念や、夢幻よりも大に正確なりとして疑はざる覺醒の一生に處して、生の前と生の後とあるを得んことを思ふ、而して其の果して之あるや、更に大に信ずべき者ありと謂ふことを敢てせざる者ぞ。孰れかかの生の前と生の後と、其の境や更に覺醒の生よりも明確にして、徒だ其の營々として生に縻がれて懸解するを得ざるを以て、此の光明世界を觀るを得ざることと、猶ほかの夢幻の中、夢幻よりも明確なる境を想ふを得ざるがごとき者ありと謂ふことを敢てせざる者ぞ。

○帋幣流通高

大藏省の調査によれば本年六月末の政府及銀行紙幣の流通高は左の如し

銀行紙幣	二四三六、九七五四、五〇〇円
總計	四八一二、六九一〇、四〇〇
前月に比し政府紙幣の減	一三五、二五〇七、五〇〇
政府紙幣(一圓以上)	一八一二、五八九五、五〇〇円
(中圓及五十錢以下)	五六三、一二六〇、四〇〇
同計	二三七五、七一五五、九〇〇

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○昨年中英米新版書

BOOKS IN 1891.

THE *Publisher's Circular* (London), and the *Publisher's Weekly* (New York), give some interesting information as to the number and character of books published in Great Britain and the United States during the year 1891.

In Great Britain.		In United States of America.	
Fiction	1,126	Fiction	1,105
Educational and Classical	694	Theology, Sermons, etc	528
Theological, Sermons, etc.	627	Juvenile	460
Juvenile	447	Educational and Classical	452
Historical, Biographical, etc.	413	Law, Jurisprudence, etc	348
Year Books and Serials	316	Historical, Geographical, etc	335
Voyages and Travels.	271	Arts and Sciences, Illustrated	331
Belles-lettres, etc	254	Belles-lettres, etc	290
Poetry and Drama	201	Political and Social Economy	197
Medicine, Surgery, etc.	175	Poetry and Drama	193
Political and Social Economy	136	Voyages and Travels.	139
Arts and Sciences, Illustrated	116	Medicine, Surgery, etc	108
Law, Jurisprudence, etc	109	Miscellaneous	170
Miscellaneous	731		
	5,706		4,665

○青年記者必讀の書

TEXT BOOKS FOR YOUNG WRITERS—In response to many inquiries, there is given below a complete list of good text-books for young writers, which answers a number of letters, and must in future serve as an answer to all inquiries of that nature:

"Writing for the Press,"	Luce,	$1.00
"How to Write Clearly,"	Abbott,	.60
"Ladder of Journalism,"	Copeland,	.50
"Art of Authorship,"	Bainton,	1.25
"Trade of Authorship,"	Dixey,	1.00
"Information for Authors,"	Kirk.	1.00
"Periodicals that Pay Contributors,"	Kirk,	1.00
"Mistakes in Writing English,"	Bigelow,	.50
"Handbook of Punctuation,"	Bigelow,	.50
"Handbook of Punctuation,"	Wilson,	1.25
"Slips of Tongue and Pen,"	Long,	.60
"Pens and Types,"	Drew,	1.00
"Words, their Use and Abuse,"	Mathews,	2.00
"Thesaurus of English Words and Phrases,"	Roget,	2.00
"Dictionary of Synonyms,"	Soule,	2.00
"English Lessons for English People,"	Abbott and Seeley,	1.50
"English Language,"	Meiklejohn,	1.40
"Language & the Study of Language,"	Whitney,	2.50
"Higher English Grammar,"	Bain,	.80
"Elements of Rhetoric,"	Genung,	1.25
"Principles of Rhetoric,"	Hill,	.80
"Rhyming Dictionary,"	Walker,	1.50
"Rhymester,"	Hood,	1.00
"Ballades and Rondeaus,"	White,	1.00
"Handbook of Poetics,"	Gummere,	1.00
"Science of English Verse,"	Lanier,	2.00

片々

可愛子編

●津市基督教青年會の矯風事業　頃日三重縣津市に「よいさこら」節と稱する卑猥なる俗謠流行し、又「ちよんこ」節と稱する俗謠流行し來りぬ、「ちよんこ」節の卑猥なると「よいさこら」節の比にあらず、基督教青年會員大に之を憂ひ、演說會を開きて義人の注意を呼び、併せて公衆に警醒を試みたり、聞く、同會員は之に安せずして、廢娼事業に盡力せんとする由。

●分部盛之氏の義擧　年々地震あり、水害あり、天の警戒交々下る、而して同胞多く醒めず、此愛々たる日本國を奈何せん、甲州の地、亦本年の水害を蒙むると少なからず、殊に同國郡内の如き、幾年にも荒れたるとさへ聞かざる桂川の水汎濫し、田畑人家を流失し、死する者も亦ありたり、郡内桂村の分部盛之氏深く之に感じ、蹶然祈禱して、(第一)二宮尊德翁の報德訓を印刷して之を配布し(第二)其地に靑年會を開きて靑年氣風の矯正を計り(第三)私立小學校を起して身自ら教育の任に當り、將來の人民を善育せん、との決心をなせり、同氏は此志を持ちて去月三十一日出京し、我が社に滯在して種々協議し、去る六日歸省せられたり、吾人は同氏の志を喜ぶと共に、更に幾多の義人を喚起する者なり。

●非日本人十字軍に對する日本靑年の運動　曾て支那人追逐を唱道して其名を博したるデニス、ケルチーといへる男は、去る七月三十一日の夜、桑港サンタ、クララ街頭に立ちて、日本人の排斥すべき所以を演說せり、愚論取るに足らずと雖も、拍手喝采せられたり、日ならずして所在の新聞紙上ノーチースと大書したる一廣告を見る、曰く「七月十六日土曜日の晩八時ターン、ヴエリーン會館に於て日本の靑年デニス、ケルチーに反對せる會合を催し卓絶せる數靑年市民に訴ゐ所あらんとす傍聽自由」云々と、當夜日本の靑年十二人、聽衆無慮一百人會合す、第一にサン、ジヨース學校卒業生なるジヨージと稱する高木某出で、ケルチーの誤謬を攻擊辨解せり、次にエノスと稱するに吉崎某「何人が米人なるや」との題にて、演じ、拍手喝采の中に局を結び、次で小和窪某現はれ「日本學生に代て訴ふ」の題にて演說し、喝采ありたり、最後に大瀧顯理出で「日本に於ける米國の感化力」と題して陳述せり、終て大統領ハリソン並にクリーブランドの萬歲を祝し次で日章旗及び合衆國旗に對して萬歲を稱すると三回、無事に閉會す、嗚呼是れ目今米國に行はるゝ非日本十字軍に對する日本靑年の運動なり、此報に接する者、誰か無限の感慨を催さゞらん。

各靑年會より報告あらば、其報告を掲載せし分だけの雜誌、無料進呈す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

去る廿二日發兌せり

女學生夏期號外

其題目下の如し

一休和尚 ……天知子

一休は乾質矯激家なり
一休は厭世的宗教家に非ず
一休は宗教界の俠客か
一休は懷疑哲學家なり
一休は八世の半可通なり

故人 ……無名氏

むかし半掃庵は奈良茶の煙に故人の魂を招き、これは故人を尋ねて母戀しの聲を聞く、

英雄 ……山月子

彼は常に最も美なり
彼は變化無極の活文章なり
彼は誠涙活火の人なり
彼は天然を愛する詩人なり
彼は基督の良僕なり

孤飛蝶 ……脫蟬子

花に飛ぶ蝶、宙宇に舞ふ蝶、此文を併せ見ば、味亦深し

怪しき木像 ……暗光子

愛眼もて荒法師を觀じ、無聲もて千載古豪を呼ぶ

望夫石 ……夕軒子

夏の夕べの漫歩きに往きぬる春の物語、苦にしみいる乙女の微笑か濱の月魂

鎌倉紀行 ……紫蕘山人

遊意所向既に人に巽る、わび住居に鄕を思ひ友を憶ふ

松風夢 ……禿木子

村荘門に客なく幽窓松籟を聽く處、雜感湧出寫して此篇に在り

號外一冊六錢●無郵稅　　女學雜誌社女學生部

巖本善治君編

女學叢書

木村鐙子小傳

定價 金八錢
郵稅 金貳錢

島田三郎君の序に曰(前略)今を距る拾五六年前世人女子敎育を說く者なく婦人も亦中饋の職を以て自ら劃り兒子敎育の要務をも擧げて初めより之れ他人に委ぬる者比々皆是なり此時期に當りて婦人敎育の要を覺り唯之を口にせずして之を躬にし自ら學び又其子を敎へて以て家道を肅するに至る是れ既に尋常婦人を以て之を見る可からさるなり特に其夫の遠方に在るに際し孤身能く衰零の家に幹するに至りては最も感ずへし余年十七八田口卯吉君と駿州の鄕校に相知り其后君と前后東京に出てゝ相往來す二人窮する甚くして學資乏絕を告ぐると屢々なり予君の居に到るに屋傾き壁破れて一見其家道の衰零を知るべし然れ共其待遇の豐厚は君の世計に過ぐるあるを覺ゆ怪みて之を他の友人に語るに亦然りといふ後に至りて其婦の鐙子君が田口君の友を待つに意を致すによれるとを知れり予の鐙子君を親く知るは實に近年に在りと雖予鐙子君の知遇を得るは實に十年以前に在りて嘗て之を知らざりしなり田口君常に言ふ予の成立は姉の助によるもの多しと此言眞に然り今や田口君世に名ありて家道も亦興れり而して鐙子君は逝きぬ悲ひ哉(中略)嗚呼鐙子君の如きは之を花に比ふるに唯梅の是に當るを待へき乎(下略)

適堂學人嘗て曰(前略)明治の世にありては老將の戰袍を脫儒衣を着せし如く戰國未開の習慣を拋て婦人嬌風の主唱となり女子敎育を率先し仔々として惰らず死にいたりて後に止みぬ嗚呼鐙子のごときは亂るゝ世の女丈夫治れる世の淑女とやいはまし此はその古人も最難しとせる所なり況や白梅の雪に包れて其香を愈よゆかしく青柳の風に揉れて其枝の折るゝ事なき風趣あるかの婦人の貞操苦節は明治女流の師表たるに足ぬべし乞ふ此卷をひもとくもの輕々着過する事なかれ。

東京麴町區下六番町　**女學雜誌社**

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

●元祖色を白くする
三能志やぼん

理化學的應用

實効確證

一個十錢

●抑も此の三能しやぼんは第一身躰の色を白し御顔等の艶を出し肌のしみ、にきび、そばかす、をとり御肌合を艶美ならしむと奇々妙々なり

○尚くはしき事は本能書にあり

東京銀坐一丁目
●發賣本舖　佐々木玄兵衛
電話番號四百七十二番

●各地ノ藥店並ニ小間物店ニ取次販賣セリ

史海

第拾五卷

目次

◎最澄及空海……田口卯吉君

最澄空海ともに我邦宗教界の豪傑なり、然るに尋常の史は之を顧みず、僧史は之を以て人間以上に上ぼせり、共に是れ偉人を遇するの方法にあらざる也、此篇を讀む者、能く當時我邦の宗教の有樣を知り且此二人の偉人たる所以を知らん

◎トーマス、マコーレイ……矢部新作君

是れ英國の史家マコーレイの傳なり、矢部君の文は柿の如し其甘味日月と共に增す

◎東方問題の起原としての十字軍…湯原元一君

十字軍は歐洲史上の大事件なり世人須らく一讀すべし、此篇說き得て詳なり

史海の批評欄は今や一大修羅場となれり、我邦古來史論の快戰未た此の如きなし

●毎月一回第四月曜日發兌●定價一冊金九錢、十冊金七十五錢
●市外は一冊に付郵稅二錢宛申受く●總て前金之事

田口卯吉君著

史海

（日本の部、卷之一より卷之九に至る田口卯吉君著の部分を編輯す）

定價三十錢
豫約價廿錢（市外郵稅四錢申受）

豫約申込九月十五日迄同日出來の事

史海の前卷既に賣切となれるもの多し而して後卷の讀者にして頗りに前卷を要望せらると雖も之に應する能はす遺憾少なからさる也故に今豫約法により之を出版し以て江湖の愛讀を請ふ（卷之八は發賣禁止となりたれとも之に掲けたる孝謙天皇の篇は訂正の上掲載せり）

大坂川口六番

照暗女學校廣告

本校ハ前ノ科程ノ外（本科四年高等科二年）更ニ豫科ヲ設ク●今回女子敎育ニ十數年經驗アル女教師ヲ增聘セリ●曾テ廣告セシ通リ九月七日入學試驗十二日ヨリ始業●志願者ノ便ヲ計リ始業后モ當分ノ內入學ヲ許スベシ●規則書ハ要望者ヘ進呈ス

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ
定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すこととす。

全部十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君內助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

明治女學校出版　女學雜誌社發賣

看護婦派出廣告

看護婦入用の節は御依賴に應じ本會より派出致可申候
但し地方へも差出し申候●貧困者は無給の事

東京本所區森川町壹番地　慈善看護婦會

通信女學第三期生新募廣告

學問隆盛の今日、女學の進步一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉強をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆學問と云ふとに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬ、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も茲に入學して日々の進步目覺しきとなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學するとも出來ず又家に敎師を引て敎を受るも甚だ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物は何なきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨及一昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義錄を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便を供へたるが、其十二月に至り、一ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの八百餘名あり、然るに、去年一日申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第三回の習讀者を募る。

敎授科目左の如し。

萬國史、日本歷史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學（衞生、育兒、看病と合す）裁縫、圖入地理、英學。

敎師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、吉田伸子、渡邊辰五郎諸氏其他重もに明治女學校の敎員諸君に委賴し、專ら深切鄭寧を主意とす。

代價一冊前金三十二錢（無郵稅）、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十五年一月廿五日第一號を發兌し、以後毎月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人著

再板増補

文法口授 一名和文獨案内

（半紙判日本綴）

目録

（一）文と云ものゝ譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文そ作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯幷に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

特別賣價 金拾二錢
郵便税 金二錢

女學雜誌社

●廣告●

今般本校各學級寄宿通學ノ入學ヲ許ス

明治廿五年九月二日

麹町區上二番町三十三番地

女子學院

本校ハ校舍完備土地高燥市街ノ雜沓ヲ避ケ眞ニ敎育ノ良地也

本校ハ學科ノ程度ヲ低クシ之ヲ授クルニ老成ノ敎師ヲ以テシ務メテ應用ノ力ヲ養ハシム

本校ハ次學年ヲ九月十一日ニ始メ各科共入學ヲ許ス

志願者ハ八月中ニ願書ヲ出スベシ規則書ハ貳錢ヲ要ス

大阪東成郡𣵀堀村

私立 浪華女學校

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

六冊	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊 金六錢 郵税 金五厘

廣告料及無料廣告

一行	一回	（廿七字詰）	前金拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

○十行以上一割引。二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部増さ定む。

東京市麹町區下六番町六番地

發行所 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三